

食イベントは町おこし！？

2年 ○田 ○生 ○川 ○弥
○西 ○美 ○山 ○奈

1 はじめに

僕達2年生は、学校祭や地区文化祭で、自分たちで考えたメニューの食事をみんなに食べてもらうことになった。そこで、このようなイベントをどのように運営すればよいかを調べることにした。

ところでみなさんは、去年別海の新・ご当地グルメグランプリに行ったことがあるだろうか。このイベントには、2日間でのべ2万2千人もの人が集まった。同じようなイベントは全国のいろいろなところで行われている。どこでも、とてもにぎわっている。

僕達は、なぜこのようなイベントを行うか、イベントはどのように運営されているか。イベントにはどんな効果があるかについて、インターネットで調べたり、取材で聞いてきた。

取材先は、別海町役場、商工観光課の松本博史さん、ドライブインロマン代表の山田君勝さんである。



取材に行ったときの写真

2 食イベントを行う理由

食イベントを行う理由は、町づくりのためである。

実は、料理を売ること自体を目的としているのではないのだ。料理を通じて「地域をPRする」ことで、一人でも多くのお客さんに現地に足を運んでもらおうという、地域活性化を目的とした「まちおこしイベント」なのである。

「新ご当地グルメグランプリ」の中心となった方は、別海町役場の松本博史さんである。松本さんは、別海に人が減っていき、お店にシャッターが閉まっているという現状などがあり、「何とかしなければ」と考えた結果、何か新しいPRをしたら別海町が有名になるかもしれない！ということでこのイベントの開催を考えたのである。

また、別海にはホタテを使った料理がある。それは、ジャンボホタテバーガーである。ジャンボホタテバーガーは2008年7月26日にデビューし、1年間に5千食売れたの

である。別海で開発した料理がこれほど売れたのは初めてだったが、富良野、北見などのご当地グルメでは、別海をはるかに超える5万食10万食も売れたのだ。松本さんは、どうしてこんなにも差がつくのかと考えた結果、別海には、鉄道がないことと、別海が北海道の端にあるということに気付いた。何か新しいことを行わないと勝てないのでは、と考え、別海町でご当地グルメグランプリを開催したのである。



別海ジャンボホタテバーガー



富良野オムカレー



オホーツク北見塩焼きそば

グルメグランプリに出た商品 (一例)

3 食イベントの準備

別海で行われたご当地グルメグランプリの資金は、別海町・北海道・(株)日本コカ・コーラ・(株)サッポロビールから出資されたお金・道産普及委員会からもらったお米を売って稼いだお金・寄付していただいたお金で、すべて合わせて1千万円以上集まった。

メニュー開発期間については、ジャンボホタテバーガーは1ヶ月しかかからなかったそうだ。市町村によっては1~2年かかる所もあるそうだ。

メニュー開発については、別海町内の飲食店である双葉、はまなす、郊楽苑の方など色々な人が考えているそうだ。

新・ご当地グルメグランプリの会場については、町に元気ができるようにと希望する町が

立候補して決まるのである。

新・ご当地グルメグランプリに出場できるかは、「食による観光町作り推進委員会」という団体が審査して決めているのである。

イベントの宣伝については、役場の人々が記者を呼び、人々にとって一番わかりやすい新聞やテレビで宣伝をしたり、お金をかけてチラシやポスターでも宣伝するそうだ。

4 食イベント当日

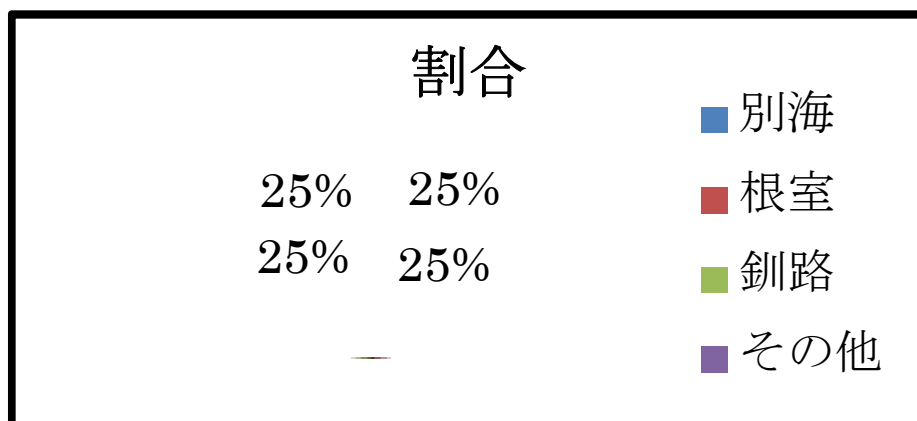
新・ご当地グルメグランプリ当日には、たくさんの工夫がされていた。このことについてまず、別海町役場の松本さんに聞いた。

運営で大変なことはボランティアの人を集めることだった。2日間で500人ぐらいのボランティアを集めなければならなかった。なぜかと言うと、駐車場での事故防止、並んでいるたくさんの人に最後尾を示すこと、イベントの集計、など色々な仕事があるためだからだ。500人以上のボランティアは商工会、農協、銀行などから出し合った。銀行の方はお金を扱うのに慣れているのでチケット売り場などの仕事をしてもらった。

当日の進行で気をつけたことは、遠いところからもお客さんが来るので、気持ちよく帰れるように笑顔で接客したり、食中毒が起らないように、保健所に行って指導してもらったことである。

サービスには、トイレ身代わりサービスがあった。これは、人気のブースに並んでいるときに、トイレに行きたくなり、また始めから並ばないといけないなどということがないように、身代わりになって並ぶというサービスだった。このサービスは別海でしかやっていなかった。

どんな人がイベントに来たかと言うと、若い人からお年寄りまで幅広い人が来た。また、開催地から近い人がイベントに来やすかった。別海から来た人25%、根室から来た人25%、釧路から来た人25%、それ以外25%という結果になっている。(下図)



別海町新・ご当地グルメグランプリに来た人が住んでいる場所の割合↑

今年のご当地グランプリは、芽室町で開催された。そのイベントに出店した市町は15で昨年より3町増えた。

そのうちの一つである大樹町は、漁業さんや酪農さんなどがいる町なので、どちらの食

材も使った料理を出さなければならなかったそうだ。

次は、ロマンの、山田さんにご当地グランプリ当日のことについて聞いた。気を付けていたことは、食中毒が出ないように手洗いや器具を、洗ったりしたことだ。また、商品を早く出せるようにトレーニングをした。その結果7秒に1回という速さで商品を出せるようになった。しかも、味が落ちなかったそうだ。

当日準備するテントは、町で準備した。

どんな人が、商品を買いに来たかという、お年寄りや若い人など色々な人が来た。中には1人で20個も買った人がいた。

食材で冷蔵庫に入れなければならないものは、保冷車を借りてその中に入れた。

5 食イベントその後

新ご当地グルメグランプリで売れた商品は、その後すぐに大ヒットするわけではない。次の年の観光シーズンが始まると、売り上げは上がるのだ。ジャンボホタテバーガーは、売り上げがなんと3倍から4倍になったのである。また、4月5月にジャンボホタテバーガー目当ての観光客が増えたそうだ。そして、イベントを通して、知らない人達と一緒に参加することで1つの目標にみんなで頑張れる、という大きな収穫があった。

6 食イベントの感想

この研究調査を終えて思ったことは、楽しく安全なイベントにするために、裏では沢山の方が苦勞しているということである。学校行事などのときに、自分達が運営する立場になったら、お客さんに楽しんでもらえるように、頑張っていきたい。

そして知らなかったことが沢山知れて、すごく良い勉強になった。この研究調査で学んだことを無駄にせず、これからの活動につなげていきたい。



(左 松本博史さん 右 山田君勝さん)



(取材をしている私達)